



中央で司教杖をもつのが中村大司教

長崎教区 ペトロ 中村倫明大司教着座式

みちあき

2月23日(水・祝)午前10時半から長崎教区浦上司教座聖堂で、同教区の補佐司教であった中村倫明師の着座式が行われた。新大司教は「大司教というのは『一人がやるんじゃないんだ。みんなと一緒にやるんだよ』ということを教皇様は何よりもご存じだと思います。どうぞ皆様方、これから共に、一緒によろしくお願ひいたします」と司教団と参列者に感謝のあいさつを述べられた。



酒井淳神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は酒井淳神父様(阿倍野ブロック)が担当。



『奉教人の死』(芥川龍之介著、新潮文庫、2001年、473円(税込))

『鼻』、『蜘蛛の糸』、『羅生門』など、学校の授業で少しかじったことがある。新人文文学賞のタイトルで名前は知っている。でも、昔の作家でしょ、あんまり感心ない……。そんなクリスチャンの若い人に読んでほしいのが、芥川龍之介の短編集『奉教人の死』(1918年)です。

芥川龍之介は100年も前の大正時代に活躍した作家ですが、彼には「キリスト教を題材にした作品群があり、その中から発表年代順に11編の作品を選んでまとめたものが、この短編集です。

まず、短編集なので読み

やすい。そして「キリストンもの」なのでクリスチャンには琴線に触れるシーンが多いです。文体に当時の口語のスタイルが使われていて、耽美的な響きと程よい抵抗感も味わえます。

『おぎん』から、少し書き出してみます。主人公の娘が奉じている(信じている)信仰の内容を作者が説明するくだりです。

『深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様』が、自然と身ごもった事を信じている。

『十字架に懸り死し給い、石の御棺に納められ給い、大地の底に』埋められたぜすす(イエス)が、三日の後よみ返ったことを信じている。

ひとつめの文ですが、かつこの部分はキリストン時代の活版印刷による教理本『どちらな・きりしたん』から、聖母賛歌(サルベ・レジナ)の一節がもとにされているそうです。

訃報

Sr. M. モニカ鹿島玉井(聖フランシスコ病院修道女会)は2月13日、老衰のため姫路にて帰天。97歳。埼玉県出身。奉献生活71年。



日本宣教の邦人第一期生の一人として、創設期の喜びと苦勞を宣教女たちと共にした。縫製力に秀で、姉妹の会服や日曜学校の子ど



もたちの劇に必要な服や飾り物の作成に惜しまず従事した。また趣味と実益を兼ねたオルガニストとしても修道院や教会で奉仕した。姫路・東京・長崎に派遣され、いつも神に信頼した明るさをもつて出会う人を励ました。



今回は、野田正弘神父様(北摂西ブロック)です。

物語は、幼少で両親を失い、長崎の信徒夫婦の養女となつたおぎんが禁教令の布かれるなか、家族ともども捕縛されてしまう話です。はりつけの刑場で思わぬ展開となるのですが……。

他にも、クリストロア、ジャンヌ・ダルク、細川ガラシャなどをモチーフにした作品も楽しめます。

洗礼は受けているけれど……、子どもの頃、教会には行っていたけれど……、ちゃんと日曜日にはミサに行くけれど……。そんなケレドな信仰生活を過ごしている方に、古くて新しい刺激的な物語の一冊です。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送)

毎週日曜日 5:50~6:00AM

2月担当: 松永 敦 神父(神戸中ブロック)

ルカ6・43-45 良い木とよい実

(27日放送分より)



——「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる」。

その木が良いか悪いか判断できるのは、その結ぶ実によってだとイエス様は言います。続く箇所には「人の口は心からあふれでることを語るのである」とあります。私達が語るの、心にはないものではなく、心からあふれ出た言葉なのだと、ここです。

この二カ所を対応させて考えると、「私達」が「木」で、心からあふれ出た「語り」が「実り」と考えられます。私たちの語った言葉によって良いか悪いか判断されるのですが、良し悪しの基準は一体何でしょうか。

そこで、植物の果実についてえたいと思います。果実を実らせるのは被子植物で、果実の中には種子、いわゆる種を含んでいます。どの植物においても、種は子孫を残す、あるいは増やす目的があります。しかし、植物は歩くことができませんので、何らかの方法で種を遠くへ運ばなければなりません。そこで植物はさまざまな手段を用いて、種を運ぶ戦略を取ります。

たとえばタンポポは風で遠くへ飛ばすという方法を採用しています。他にも引っ付き虫のように動物や人にくっついて散布してもらう手段を選んだ植物もあります。そして、果実を実らせるものは鳥などの動物に食べてもらうという方法をとったものです。ですから、種子を遠くへ運ぶという目的から考えると、福音

の中で言われている果実が良いか悪いかの判断基準は、種をより広く、より遠く、より多く蒔いたか、です。そして、それを判断できるのは私たちというよりは、のちの時代を生きる人びとではないでしょうか。その理由は、種の性質を考えればお分かりになると思います。

小学校で学ぶ発芽の3条件は、適切な「温度」「水」「空気」です。3つ目の空気が必要な理由はタネも呼吸をしているからです。よく3条件に間違えられる「光」は、多くの植物の種が必要としているものの、必要としない植物もあります。ですから、種は都合の悪い環境では発芽しないということです(※)。

具体的な例を挙げます。2009年にトルコのセイトオメル遺跡の約4000年前の地層から3粒の種が発掘されたというニュースがありました。この種を栽培すると、発芽したのだそうです。つまり、約4000年も種として生き延びてきたことになります。というように、種は条件がそろわなければ発芽しません。

聖書の言葉も同じだと思います。私たちと同時代を生きているクリス

チャンの中に「立ち返れ」というエゼキエル書の主の言葉(33・11)によって回心した人や「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」という使徒言行録(9・4)のイエス様の言葉によって回心した人がいることから分かるように、みことばの種が発芽するのにも条件がそろう必要があります。

クリスチャンは福音に基づいた生き方をします。イエス様のように語り、イエス様のように行うように心がけています。しかし、誰にでも弱さがありますから、まったくイエス様と同じではありません。そのように考えると、例えの木は私達で、実は語り、そして果実の中の種はみことばと解釈できます。

イエス様のように生き、イエス様のように語ろうと心がけていれば、みことばの種は私たちの語りという果実に包まれながらも、他者のうちに蒔かれるということではないでしょうか。そのような希望をもって福音を伝えてまいりましょう。

(※)【参照】田中修『タネのふしぎ』サイエンス・アイ新書、2012年